

第八章
迷走

「世間ではゴーツー・トラベル・キャンペーン中止の意見が多かったが政府は止めなかった。誰も愚策だとは言っていない。時期を考えろと言っているだけ。『経済が大事』なのは誰もが承知している。でも新型コロナウイルス感染を拡大しかねない旅行はいずれ観光業界にしつぺ返しを与えると考えるのが大方の国民の意見」

田中はため息をついてから続ける。

「感染拡大で儲かっている会社もあるけれど人手が足りないとか材料が確保できないとかで困っている。いずれにしても新型コロナウイルス感染で困っている事業者が多い。そこを上手に『調整』するのが政府なのに、きちんと説明もせずに『キャンペーンを中止する考えはありません』の一言だけ。まるで国民の気持ちを逆なでするような真逆のことばかりするように……僕には見える」

田中の考えに同調するかのように大家が追加する。

「総合的に、俯瞰的に、危機感とスピード感を持って、緊密に関係各省庁と協議して調整をした上でしかるべき時期に専門家会議に諮ったうえ結論を出したい……。もうこんな言葉は聞き飽きた。どこにどんな問題があつて、具体的にこういう対策を打っているというような、わかりやすい説明を聞きたいのじゃ。『思われる』ではなく、『状況はこうだ』と明言して欲しい。悪い情報は早く伝えて貰わなければ困る。良い情報は遅れてもいい。昔のように戦争で『勝った勝った』と言う政府の報告を真に受ける国民はいない。正確な戦況を正しく伝えることが大

第八章 迷走

事なのじゃ」

山本が頷くと画面から消える。

「これを見てください」

首相ではなく新型コロナウイルス感染対策も担当する経済再生担当大臣のこの一月間の記者発表がランダムに現れる。『総合的』や『危機感』や『緊張感』や『調整中』などの同じ言葉がいやと言うほど繰り返される。どこが違うのか区別できない変わり映えのしない映像が流れる。同じ映像が繰り返し返されているような錯覚に陥る。

「マスコミも突っ込まないなあ。たまには『政府の発表は昨日と一字一句同じです』と批判すればいいのに」

「そんなことをしようものなら記者会見場から閉め出されてしまうわ。昔の私のように」

山本は果敢に取材し記者会見で官房長官を追い詰めたので、ついに会見場への入場証を取り上げられてしまった。一方、その場にいたほかの記者は沈黙を守り報道の自由と入場証を交換してしまった。

『重症者の数は都独自の基準によると〇〇人で……』と報道されるけれど国の基準に置き直して報道しなければ他の道府県と比較できないわ」

「それに『稼働病床数が八十パーセントを超えて医療崩壊が起こりつつあります』と言うけれど、ベッド数より医師や看護師の治療余力がどれだけあるのかをなぜ政府は国民に説明しない

第八章 迷走

んだ。マスコミも突っ込まないし報道もしない。いつもベッド数だ。ベッドが必要なならベッドメーカーに発注すれば解決する」

「なるほど」

「大家さん。のんびりと『なるほど』と言ってる場合じゃないですよ。医師や看護師が退職し始めているらしいの」

「そりやそうじゃろ。新型コロナウイルスの感染を嫌って通常の疾病者の来院数が大幅に減少した。診療収入が激減して給料は減るしボーナスまでカットされたりと医師や看護師のテンションは大幅に下がってる。ゴーツー・キャンペーンよりも医療従事者に配慮するキャンペーンをすべきじゃ。『医療従事者の皆様。ありがとうございます』と言うより待遇を改善しなければならん。都知事なんか『病床数が足りません。一〇〇〇床増やすように要請しました』と簡単に言うが、すでに医師や看護師が不足して過労になっているのに、さらにサービス残業しろというのじゃ。これでは過労死するか退職するかどちらかの道しか残されておらんじゃ」

大家が興奮して手足をバタバタさせるとすかさず田中が両腕を広げる。

「まるで兵士の気力や体力を無視する將軍みたいだ」

「こんな戦い方でウイルスとの戦争に勝てると思ってるのか。戦争中だというのに三密を無視して自分たちは美味しいものを食って調整中だといって動かない。もし医師や看護師が退職すれば敵前逃亡だと言いがかりをつけて軍事裁判にかけるのが目に見えるようじゃ」

「それでも退職の道を選ぶというのはよほど追い詰められているのだわ」

「とても『なるほど』と言えない。なんとかならないのか」

「しかも医療従事者に、にわかに関発されたワクチンを投与するというのじゃ」

「そうなの。新しいワクチンの場合どれだけ副反応が出るか不明なのです」

「副反応？ 副作用じゃなくて？」

田中の質問を無視して山本が続ける。

「このままでは医療従事者はワクチンの有用性を確かめるための実験台になるかも知れないわ」
ここである看護師が山本の取材に応じる画面に変わる。

「中傷誹謗にめげず頑張ってきましたが今は背後からの銃弾で倒れるような感じがします。肉体的にも精神的にもボロボロです。のんきに会合する総理や都知事を見ればやる気をなくするのは当たり前。それに私どもはワクチンの光と影を熟知しています。にわか仕立てのワクチンの実験台にされるのはたまったものではないです。もし副反応が出たときの対策を考えておくべきです」

「医療従事者だけではなく保健所も大変らしい」

政府は財政難から国民の健康に不可欠な保健所の数を減らし続けてきた。世界でも最も衛生的だとされる日本にこれ以上保健所は必要ないと言うのが表向きの理由だった。歴史上人類が

勝利したウイルスはたったの二種類に過ぎない。マンパワーそのものが必要な組織である保健所を縮小するのは自殺行為とも言える。

ベッド数を増やしてもベッドは何もしてくれない。医師たちがいるからこそ機能する。患者を寝かせるスペースさえあれば極端な話、ベッドは不要。医師たちがなんとかする。

「ベッド数（病床数）を確保するよう病院に要請した」

厚生省や都道府県は滞りなく指示しているとアピールするが、それは「疲れたらベッドに横になって休憩してください」と言っているのに等しい無責任なことだ。本来は次のように要請すべきだ。

「ベッドはもちろんのこと必要な医師や看護師を確保するようお願いをした」

有事に備えてイージス艦を、ミサイル防衛システムを、とか熱心に語るが、これと同じで保健所も有事の時に備えて十分にマンパワーを蓄えておくべきだ。それ以上に保健所の機能を維持することが重要。でも歴代の首相は自衛隊の観閲式に出席するが、保健所に向いて激励することはしない。

権力者とはそういうもので、病院や保健所を回って「有事に備えよ」とは訓示しない。もちろん士気をあげようとしてもしない。防衛予算はしっかりと確保あるいは増額するが国民の健康関係の予算はざっと削り続けてきた。

いつの間にか山本が画面から消えてビデオが流れる。

第八章 迷走

「必要以上に衛生面で手を打つ必要はない」

高齢化社会が明白になり健康保険制度の先行きが怪しくなった頃の厚生大臣の記者会見だ。

「寿命がどんどん延びている。たとえば保健所機能を拡充しても、かえって百害あって一利なし。極度の清潔な環境はかえって免疫力を落とす」

かなり乱暴な意見だ。

「我が国はサーズやマーズの感染を完璧に凌いだ。今の体制で十分に対処できる。それより健康保険制度の維持が大事だ。高齢化社会が進展すると医療費が増える。病院も過剰診療をする。保険料を引き上げるか、過剰診療を止めさせるか、薬価を下げるか……」

大臣が咳払いする。

「……これらすべてを実行しなければならぬ。それと先ほども言ったとおり保健所や病院をスリム化する必要がある」

ビデオ映像に重なるように山本が現れる。

「その結果新型コロナウイルスにポコポコにやられています。もちろん日本はましだということも知れませんが。でもそういう次元の問題ではありません」

「そりやそうだろう。どう考えても今回の感染拡大対策は胸を張って他の国に『教えします』なんて言える代物ではない」

山本が苦笑いする。

第八章 迷走

『一〇〇年もつ年金制度ができました』というのと同じね」

「一〇年どころか、五年も保たなかったのじゃ」

「あーあ。人間も怖いけれどウィルスも怖い。軍艦より保健所を充実させなければ」

「権力者は軍隊が好きなのよね。大国はすべて巨大な軍隊を保っているわ」

「人類の歴史始まって以来、宗教と軍隊はなくなることはないのじゃ」

おもむろに大家が正座する。

「人間は死を恐れる。それを和らげるために宗教を発明したのじゃ。一方、自分をそして家族を守るため、血縁関係を重視した。そして血縁集団を守るため武器を進化させ戦士を育成した。つまり軍隊を組織したのじゃ。この二つは連綿として今に至っておる」

山本も田中も大きく頷く。

「軍隊を持つとその力を試したくなるのじゃ。戦争の始まりじゃ。人類は戦争の歴史を築き上げるために生まれてきたのじゃ。すべてが戦争に向かって動員される。もちろん力で押さえつけた結果として次に求めるのは平和じゃ。今度は己が標的にされるのを避けなければならんのだ。守りの体勢に入る。一方どうしても緩みが生じる。いつの間にか新しい武器の開発が始める。息抜きがうまくいかなくなつて臨界点を超え再び争いが始まる。周期の長短はあるがこの繰り返しが人類の歴史じゃ」

大家の気迫ある理論展開に山本も田中も押されっぱなしで黙り込むが、何とか山本が発言す

第八章 迷走

る。

「でもコロナウイルス感染拡大の中でそんなこと言ってられないわ」

田中も続く。

「国同士や地域紛争は鎮静化しているけれど対コロナウイルスで結束しているかと言うとそうでもない。それにほとんどの国では対策が後手に回っている」

田中の見解に山本が相づちを打つ。

「私たちマスコミに身を置くものにとつて取材もままならないのが辛いわ。政府に取材しようにも調整中とか、すり合わせに時間がかかるとか言つて対策の具体的な内容を取材できないの。それに三蜜を避けるという理由で会見はよほどのことがない限り開かれない。三蜜はいい隠れ蓑だわ。散々濃厚会食をしておきながら……」

大家が首を縦に振りながら引き継ぐ。

「『五名以上の会食は止めましょう』といったその日の夕方に二十数人で高級料理を楽しんでいた。何ということじゃ」

「今や情報量は数年前に比べて何十倍にもなって、しかもその伝わる速度も瞬間的です。先ほども言いましたが、政府は関係省庁の意見のすり合わせに時間がかかるとして、官房長官の顔に『調整中』という紙が貼られたままです」

「すりあわせする相手を間違えとる！」

第八章 迷走

大家の興奮に田中が首をかしげる。

「すりあわせをすべき相手は国民じゃ！」

「なるほど！」

反応したのは田中でなく山本だったが、田中が大家の手を取る。

「そのとおりです。賛否はともかくアメリカの大統領は議会はもちろん側近もツイッターで直接国民に情報を発信する。それも一日にこれでもかと言うぐらい何度も」

「確かにすり合わせの回数と三密飲み会の回数が比例しているように見えるわね」

「まずすり合わせを止めるべきじゃ。デジタル化してもすり合わせがなくならなければ『スピード感を持って』なんて『床に落ちた餅』じゃ」

「床に落ちた餅？ 絵に描いた餅じゃなくて？」

山本が首をひねる。

「そうじゃ。『絵に描いた餅』ならまだヨダレも出るが、『床に落ちた餅』はヨダレも出んのじゃ」

「なるほど」

「もういい加減に『スピード感を持って』などとその場しのぎの言葉は止めて『ノロノロ感を持って』と訂正すべきじゃ」

「それに『危機感』や『緊張感』と言うセリフも止めて欲しいな。エラの張った深海魚みたい

第八章 迷走

な顔をしてそんな言葉を並べても国民の方はダレてしまう。そのうち言うことを聞かなくなる。オオカミ少年ではなくオオカミ総理」

「なるほど」

『なるほど』の連発も止めたいわ」

大家と田中は口を手で覆う。

第八章 迷走